



TITLE:

静脩 Vol. 2 No. 4 (1965.11) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 2 No. 4 (1965.11) [全文]. 静脩 1965, 2(4)

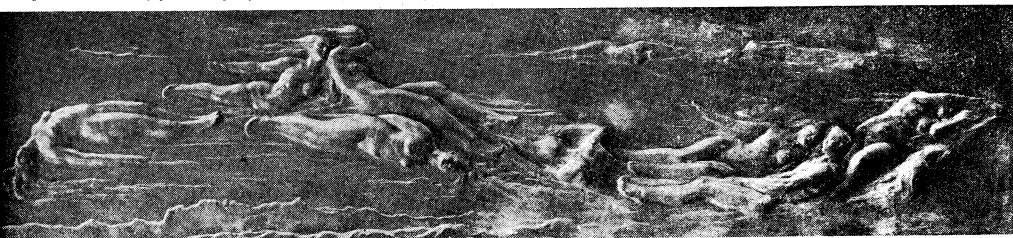
ISSUE DATE:

1965-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65910>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1965年 11月

Vol. 2, No. 4

本の顔を見る

野 間 光 辰

毎年4月になると、講義始めにきまって学生諸君にいふことがある。「本の顔をよく見てください」。『本の顔を見る』それはこうである。たとえば、講義でも演習でも、或は自分の読書の場合でも、かくかくのことは何々の本に見える、これについては何々を参照せよとあれば、そのまま聞き流し読み流してしまはないで、何かのついででもよいから、図書館なり古本屋でも一度は必ずその本を手にして、当面の関心の箇所を自分の眼で確かめ、欲をいへばさらにその本の大体の性質・内容まで心に留めておきなさい、といふことなのである。大学4年間における講義・演習・読書の量は、高が知れてゐる。教へられたこと読んだことだけを鵜呑みにして、レポートを書き論文を書いて、それで単位の数だけを揃へて卒業といふのでは、何が大学生だ、何が学士だといひたい。大学4年の生活で最も大切なことは、研究の精神を養ひ研究の方法を身につけることである。研究とは自己の独創を発揮することである。これは何も専門の学問の研究に従事し、将来学究として立つ人だけに限ったことではない。広く実社会に出てあらゆる職場で働く人々にとっても、なくては叶はぬものは研究の精神・独創性である。『本の顔を見る』といふことは、つまりそのための一つの自己訓練である。必ず直接に自分の眼で確かめる、本の顔を見知っておく。それだけでも、次の機会に同じような問題に遭遇した時に、或はもっと違った問題にぶつかった時にでも、自分で調べまた考へる材料を容易に蒐集することが出来るといふものである。

近年における新しい傾向として、どこの図書館でも開架方式（オープン・システム）を採用してゐるが、我が文学部の閲覧室では、明治の創設以来、閲覧者による書庫検索といふ形式で、1回生の時から自由に本を抜き出し、手当たり次第に『本の顔を見る』ことが出来るようになってゐる。（附属図書館の方は卒業論文を書く3回生以上大学院の学生にだけ書庫検索を許されてゐるが、これは全学の学生が利用する性質上資格の制限を加へたのは已むを得ない）。しかしこの書庫検索の制度は、当時他の大学では行はれてゐなかつたように思ふ。それは多分現在でもそうであろう。さしあたって調べる目的のない時でも、書庫の中を歩いて自由に『本の顔を見る』ことが出来るのは、それだけで大変楽しいことである。私は学生時代から今に至るまで、この『本の顔を見る』自由と楽しみを享受してゐるが、これは広く全学の学生諸君にも勧めたいと思ふ。

『本の顔を見る』ことのついでに、今一ついっておきたい。自分にとって必要な本は、『顔を見る』だけでは済まない。どうしても座右に置きたい。それが人情である。買へなければ写す。出版が比較的盛んであつた江戸時代でも、多くの人は本を借りて来て自分で写したものである。ところがこのごろの学生は、といふのは私の実際の経験をいふのであるが、演習・購読のテキスト或は参考書でも、自分で買ひ求めないで、附属図書館から借り出して1年間間に合はせてゐる者がある。もっとも本の高価な時節だから、已むを得ないといつてしまへばそれまで、これでは他人迷惑である。『本の顔を見る』ことの外に、『本を写す』ことも勧めたい。当節は写真またはゼロックスによる複写が盛んであるが、それも出来ない時には、自分で書写するだけの情熱があつて欲しいものである。

(文学部教授)

東洋学文献センター発足す

かねてから、東洋学研究者の念願であった東洋学文献センターは、京都大学人文科学研究所内に設置されることになり、本年7月1日から学内外の研究者に公開された。このセンターは、人文科学研究所に所蔵する漢籍6万部、10万冊を基盤にして、さらに必要文献で欠けているものを収集、整備するとともに、これらの文献を広く研究者の利用に供することを目的としている。

つぎにセンターの機構と事業とを簡単に紹介しよう。

位置 京都大学人文科学研究所本館
設備 受付、事務室、閲覧室、研究室のほか地階に機械室を設け、次のような機械を整備して文献複写を行なう。

エレフアックス、オフセット印刷機、マイクロフィルム撮影機、自動フィルム現像機、自動フィルム乾燥機

人員 センター長（所長兼任）、主任（人文科学研究所東分部教授）、助教授1名、助手2名、事務官1名、技官1名、事務員2名（但し本年度は長、主任のほか助教授と助手1名、事務員1名が決定）なお設備、人員は本年より昭和42年度までの3カ年計画で充実する予定である。

事業 センターで行なう事業には、文献収集、閲覧、文献複写、参考調査、目録等の刊行による情報の提供があげられる。そのうち文献の収集では、蔵書中もっとも不備を感じる明代文献の収集に重点をおき、本年度は、東京内閣文庫所蔵「明人文集」約8万コマを撮影する。また、従来研究所で行なってきた「東洋学研究文献類目」を本年よりセンターに引き継ぎ、各年度に発表された東洋学関係の研究論文、単行本を収録する。

さらに、資料速報や新収文献目録の刊行、日本に現存する漢籍の総合目録等が計画され、活発な情報提供を行なう。

なおこのセンターを利用できる者は、本学ならびに国公立大学の教官、これに準ずる機関の研究者、大学院学生およびとくにセンター長が認めた者となっている。

利用時間 9.00～16.30 但し土曜9.00～12.00 日曜、祝日、本学創立記念日、年末、年始は休止。

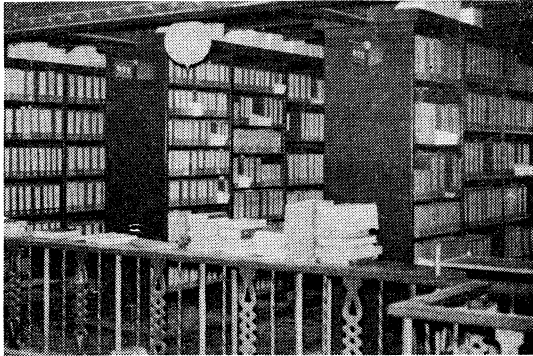
利用に際しては、申込書（閲覧申込書、文献複写申込書）を提出して、承認をうける。

閲覧は1回5点以内、閲覧室以外への帯出、貸出を許されない。参考調査については、文書、口頭、電話等で行なってもよいが、解答は、依頼事項に関する参考文献の紹介、その所在、利用方法の指示に止める。

長期間の閲覧を希望する場合には、閲覧票交付願を提出する。

現在、文献複写業務は、設備、人員の不備からセンターで行なっておらず、複写申込みがあれば、業者に紹介して複写させており、したがって料金規定などは、まだ決っていない。

以上がセンターの概要であるが、まだ緒についたばかりで、センターとして大々的な活動は、今後に待たねばならないが、すでに毎日多くの閲覧者があり、外国人の来訪も少なくなく、東洋学研究者にとって、このセンターに期待するところが大きいことを物語っている。



僕と図書館

鈴木 輝 康

僕がこの大学に入学を志願した大きな動機の一つは図書の蔵書が多いことであった。もし僕が講義に魅力を感じなくなっても、いつまでも学問に対する興味を失わずに学問が続けられるであろうと思ったからです。

図書館の蔵書は古文書が多く、洋書、自然科学系の和書が少な過ぎると聞いたこともあったが、図書館の魅力はまだ僕の心から去ってはいない。

僕はまだ1年生なので図書館も教養部図書室、附属図書館、アメリカ研究センター図書室ほどこしか利用していません。教養部図書室は講義科目の復習ぐらいが精一杯で、附属図書館は夜間も利用できますから、復習も含め、一般教養の書籍を利用し、アメリカ研究センター図書室は時間的に制限されていますが、利用者も少なく、非常に静かで落ち着いて、じっくりと本が読め、洋書の社会科学、人文系の本を時々暇をみつけては読んでいます。

借り出した本の中には初めの一章ほどは活字の見えないほど、やたらとペンで線が引かれていたり、書き込みのしてある本がある。こういった本は非常に読みにくく、読むのが嫌になってしまうこともあり

ます。利用者はもっと公共のものを大切にしないと行く末も案じられます。

ちょっとあの本のある章が読んでみたい時もある、少し専門的な本を求めるのですが、教養部図書室や附属図書館は在庫が少ないものですから、大学内に本はあっても、研究室や部局図書室に所蔵されていて、利用しにくいこともありますので、大学でも最も利用度の高い両図書館の蔵書内容の充実を図って欲しいと思います。

僕が両図書館について不思議に思うことは語学に関する本が文学部とかそれぞれの研究室には多いのですが、両図書館とも少ないことです。語学上の疑問の生じるところにいつでも利用できるようにもっと豊富に揃えてもよいと思っています。また種々の分野の芸術に関する本がもっと多くあっても良いのではないかと考えています。

附属図書館の閲覧室の広すぎるのが、かえって利用上、逆効果を生じていることは、これまで多くの先輩などが指摘されていますし、できるだけ早い機会に、十分将来の利用を検討した上で、利用者が気軽に、しかも落ち着いて読書ができるよう改善していただきたいと思っています。

新入生のことですので分らないことは多くありますが、ただ気の付いたことを述べただけです。今後、図書館が自分のものであると同時に、みんなのものであるという時が来ることを期待しています。

(医学部一回生)

「小沢芦庵」展開催

江戸中期の歌壇に「たゞごと歌」を提唱して、歌論に作歌に活躍した京都歌壇の雄、小沢芦庵(1723~1801)に関する展覧会を、今年度読書週間に因んで、11月9日~11日の3日間開催した。

陳列室にその著作の原本、自筆本、筆蹟等約70点を展示するとともに、10日午後2時から会議室において、鈴木鹿三七氏および芦庵研究の第一人者医博中野武氏の芦庵についての講演会を開催し、芦庵顕彰に大きく貢献した。

「ビュッヒャー文庫」の整理再開

— 経済学部 —

後期歴史学派の経済学者カール・ビュッヒャー教授の蔵書約9,000点の整理が経済学部で今年度から再開されることになった。この文庫は大正13年故岩崎小弥太氏によって本学経済学部へ寄贈され、当時一部分整理が行なわれたが、その後長く中断されていたものである。内容は経済学、統計学、新聞学などにわたり、現在では容易に入手できないものも多数含まれている。従来より学内外から、しばしば目録出版を要望する声があったので、経済学部では同文庫の整理終了後、できるだけ早い機会に目録の出版にとりかかりたいとの希望をもっている。

国立七大学附属図書館協議会開かる

本年度の国立七大学附属図書館協議会は、9月28・29の両日、九州大学で開催された。この協議会は本年で協議会発足いらい39回目を迎える。日本の図書館関係の会合としてはもっとも伝統のあるもののひとつである。

本年度から、京大、東大以外の5大学にも部課長制がしかれたため、この協議会も、館長、事務部長のほか、課長も出席し、従来よりいっそう賑かになった。そのため討議も活発で、収穫の多い会合であった。

議題としてもっとも論議が集中したのは、全学的な図書館網の組織化の問題であった。ある大学では、既存の部局図書室のほかに、新たに総合図書館という概念を導入し、附属図書館を部局図書館と総合図書館で構成した。

これに対して、他のある大学は、各地区にあるいくつかの部局がそれぞれひとつの図書館を作り、それら各地区図書館の集合体をもって、附属図書館を構成しようとしている。この場合は、従来の本館とか分館とかいう概念は消えてしまう。もちろんどの地区かの図書館が総合的な機能を果たことになる。これは今までに見られない全く新しい試みとして、いろいろな問題点を包蔵してはいるが、注目を集めた。

大学図書館の近代化のための体質改善策として、一大学内の各図書館単位間の調整連絡組織が、なんらかの形でつくられなければならない。そのための前提としては、図書館間の機能の分化が十分に行なわれていることが必要である。協議会に京大から提案した「Research Library と Undergraduate Library の概念の検討と基準の設定」という協議議題は、本館、分館という単なる機制的な組織化の前提として、図書館単位間の機能的な組織化の検討が必要であることを強調しようとしたものであった。機構は機能に基づくものでなければならないからである。

各大学とも、それぞれに古い伝統の上に立っている。それだけに、大学図書館の近代化をどのように受けとめていくかについては、各大学ごとにいろいろの苦悩があり、またその解決策も、それぞれに異なったものでありうる。それにしても、原理はひとつでなければならない。学習図書館の機能と研究図書館の機能の明確化ということは、その原理のひとつであろう。

協議会には、文部省からも渡辺情報図書館課長、田保橋係官も出席され、いろいろと助言をいただいた。いつもはジェット機の号音に悩まされる九大であるが、協議会中は遠城寺九大総長も驚かれたほど静かな秋の2日間であった。

京都大学図書館改善特別委員会（第8回）

9月21日午後3時 於附属図書館会議室

今回は部局図書室を中心に保存図書館、学問別専門図書館について検討された。

1 部局図書室について 部局図書室の機構の面ではかなり整備されてきているが、その性格が明確でないため機能が充分効果的に働いていないのが現状である。部局図書室は今後研究図書室としての性格をもったものにして行くことが望ましい。その前提として現在ある制度上の種々の隘路を打破し、また部局図書室の機能的な面の充実のためには職員組織が改められなければならないと考えられる。

2 保存図書館について 保存図書館の機能が十分に生かされず、重複図書等の有効な活用が現在なされていないのは単に easy going な根性とケチ根性によるばかりでなく、重複の発見のために要する人的能力の不足、不用なものの決定のむずかしさなど、困難な問題があり今後さらに検討されねばならない。

3 学問別の専門図書館について 学術会議の第4部の長期計画で文献センターの設置が考えられているが、専門図書館についても、一大学内の専門図書館に限らず、日本における学問分野の専門図書館としての機能をも考えて行く必要がある。

—— 資料紹介 ——

経済学部 上野文庫について

上野文庫は朝日新聞社の前会長、上野精一氏が蒐集され、京都大学に寄贈された、図書、新聞のコレクションである。昭和30年の第1回以来10年間、現在までなおひきつづき総計約1万点の寄贈をうけている。

新聞事業経営者としての氏については今さらあらためていうまでもないが、「英国新聞史論」の著者であり、またJ. ミルトンの「アリオパジーティカ」を石田憲次博士・吉田新吾氏と共に邦訳されたすぐれた新聞学研究者である上野精一氏の蔵書であるこの文庫が、新聞学関係の図書のコレクションとして非常に貴重なものであることは勿論であるが、本文庫の内容はひとつに新聞学に止まらず、広く社会思想、社会思想史、経済学、法学、政治学、歴史学、文学、倫理学、哲学などの範囲に及んでいる。その各々についてここで紹介する紙数はないが、経済学部では学部内外の研究者の協力により、「上野文庫解題目録」新聞部門1, 2, および一般部門1を完成した。これには8,792点の図書、新聞が収められている。また本文庫の沿革についてもくわしい記載があるので、中央図書館、各学部図書室で同目録をご覧いただければ、本文庫の全体の姿がご理解いただけるものと思われる。

なおまた、経済学部では寄贈者・上野精一氏のご意志にそい、本文庫が広く利用されることを願い、「上野文庫図書運用暫定規定」を定め、上記目録一般部門1の末尾にこれを附した。ご一覧の上、多くの研究者が上野文庫を活用していただくよう希望している。

次に上野文庫の蔵書中より一、二を挙げてみると、

1) ニュース・レター (1690年3月～12月)

新聞の先駆的な形として、政治・経済の中心地にいる通信者が一定の契約者に手紙の形で定期的にニュースを送った、これは一般にニュース・レターと呼ばれているが、現存しているものは多く断片的なものである。本文庫所蔵のものは上記期間中、週3回、Sir W. Ashtonなる人にあてて出されたもので3点の欠号をのぞき113通がそろっている。新聞の歴史上貴重な資料である。

2) The Spectator. No 1～555 (1711年3月～1712年12月) Sir Richard Steele と Joseph Addison 創刊の英国の新聞、本紙は新聞史上のみならず、英文学史上にも著名な新聞で、数多くのリプリント・縮刷版が作られたが、これはその第1号より終刊号まで555点の実物をそろえて1冊に製本したものの。本紙の完全なセットは非常に数少なく、貴重である。



平野国臣関係資料寄贈される

さきに二度にわたって平野国臣関係の資料を寄贈された神戸市の陣野稔氏から、また、国臣関係資料6点の寄贈を受けた。

いずれも重要な資料であるが、そのうち特に「福岡藩主の下問に答えた意見書2通」は、複雑な当時の政局に対処するための藩主としての行動、政策を委曲をつくして具体的に示した両度の意見書であって、極めて貴重な史料である。



教育学部図書室

沿革

明治39年、京都帝国大学文科大学に教育学教授法講座設置。

昭和24年、新制京都大学教育学部設置。

教育学部は、教育原理関係、教育心理学、教育社会学、教育行政学、図書館学等の講座を設置している。その研究分野は極めて広く、人文、社会科学の領域に止まらず、自然科学の分野にまで関連を持っている。したがって教育学部図書室の蔵書構成も、教育学、哲学、心理学、社会科学等を中心に専門図書館としての要請に応えるよう配慮されている。

建築

現在、附属図書館の北側に白い美しい建物があり、更に増築中である。それが完成した暁には、これまで分散していた教育学部の研究室が、一カ所に集まる訳であるが、図書室はその中に入るのではない。それは、附属図書館をへだてて、南へ200～300mも離れた、赤レンガ三階建ての、かつて、地球物理学教室であった建物を使用している。

この建物は、明治30年の建造になり、アカデミックな雰囲気を与えているとはいえず、天井の雨漏り、コンクリート床のひび割れが、漸く大きくなろうとしていて、これ以上、書物を収容することは危険である。

その一階に整理室と書庫（文学部より保管転換の図書及び、小西文庫、高橋文庫を収蔵）がある。二階は開架閲覧室で、三階には雑誌閲覧室を設けてある。

あとがき

▶館内めぐりにかわって、新しく東西南北が連載されます。これは近年急激に増加した図書資料の山を前に、人手不足をはじめ、いろいろな問題や、悩みを抱えながら、どうすれば利用者に満足されるサービスを行ない得るかという課題に取り組んでいる部局図書室の現状をご紹介します。本号を皮切りに逐次さまざまな様相を呈して皆さん

蔵書

全蔵書数は、教育課程文庫等を含めると、3万7,000余冊ある。その中、文学部旧教育学教授法研究室より保管転換した、約6,400冊は、教育学関係文献の宝庫として、広く全国研究者に知られている。また、小西文庫、高橋文庫と称する2つの文庫は、前者は、昭和8年総長となった、小西重直博士の、後者は、教育学者、高橋俊乗博士の旧蔵書である。それらは、文学部より移管された図書と併せて貴重な文献となっている。

業務と展望

教官の教授・研究活動及び学生への奉仕を旨としている。現人員（定員4人、非常勤2人）では、十分なサービスを行ない難いが、新着の寄贈紀要に関して、コンテンツ・シート・サービスを昨年開始した。また、夏期休暇中は、図書室の整備に力を尽くしている。今年は雑誌の整理に着手した。その結果、従来不明瞭であった寄贈雑誌についても、把握できるであろう。

何処でも図書館は、スペースの問題に一番、頭を悩ますが、当図書室でも、現在の建物並びに隣接建物の幾室かを使用しても、数年にして限界に達すると思われる。

大英博物館では図書室を中央に、その周りに研究室を配し、利用に至便である。専門図書館としての部局図書室の使命に鑑み、その新築に際しては、範とさるべきものであろう。



んの前に現われてまいります。どうぞご期待下さい。

▶私達は皆さんがこの記事を通して部局図書室の実状を理解され、問題点をくみとっていただくとともに、図書館の本来の姿はいかにあるべきかといったことについて考えていただければ幸いに思います。